

---

# 桜夢～さくらゆめ～

酒井 優羽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜夢くさくらゆめく

### 【Nコード】

N4792L

### 【作者名】

酒井 優羽

### 【あらすじ】

ゲーム「薄桜鬼 随想録」のメインキャラ六人と千鶴の各恋情想記のその後のほのぼの話。短編になっております。全六話予定。各キャラクターの良いところがちゃんとでていれば嬉しいです。

青空の下の一室にて〜風間 千景編〜

『迎えに来たぞ。』

『……………俺は待った。』

『充分待った。』

『これ以上、俺を待たせる気か？おまえは何様のつもりだ？』

そう久しぶりにあった彼は、私に言った。

風間 千景、私 雪村 千鶴が新選組に身を預けていた頃に幾度となく同じ鬼である私を狙い、新選組と対峙してきた。だから私も風間さんと敵対していたも同然だった。

しかし戦の最中、新選組のみんなとはぐれてしまい敵兵に襲われていた私を救い出してくれたのは風間さんだった。そして彼は、新選組のみんなと合流したいという私に協力し旅に同行してくれることになった。

長い長い旅路の中、私はたくさんを知った。私の鬼の一族・雪村本家や鬼について…………。風間さんは、私の知らないことを教えてくれた。そして私は気付いたのだった。彼はそんなに悪い人ではなく優しい人だ…………。

そうして私達は蝦夷地に着いた。けれどももう戦は終わり、その地には戦の跡が残っているだけで新選組のみんなはいなかった。そして見つけた。おいていかれた『誠』の旗を…………。私はただ泣いて結局みんなに…………会えなかった。そうすることで思い知らされた。みんな『終わった』のだと。

風間さんは、言った。

『新選組の奴らは最後まで侍を捨てずに戦った。俺も、そんな馬鹿が嫌いではない。』

彼は、新選組を認めてくれていたのだった。

そして彼と私はその地で別れた。

『心の整理がいたら俺のところへ来い。いや、来なければ迎えに来る。』

そう言い、風間さんは私の唇を奪い、去っていった。

そして・・・それから五ヶ月が過ぎた。私は江戸の自宅で生活していた。そして、つい昨日・・・彼と・・・風間さんと再会した。『迎えに来る。』というその言葉を彼は守ったのだった。そして、これは彼と再会した次の日のこと・・・。

3

ピチチチチ・・・外の小鳥の鳴き声で私は目が覚めた。あ、もう朝だ。朝食の準備をしな・・・そこで私の思考は止まってしまった。

「え・・・?!」

我ながら朝から変な声をだしたと恥ずかしくなってしまう。けれど・・・。

「か、風間さん?!」

私のすぐ側に彼の寝顔があった。鬼は格式と伝統を重んじる生き物だから祝言までは手はださないから安心しろと彼は以前言っていた。だから少しだけ安心して眠っただけれど・・・。近すぎる! そう思ったと同時に顔が赤くなるのを感じた。

「もっつ・・・。」

私は風間さんを起こさないようにゆっくりと起きると、違う部屋で着替え朝食の支度を始めた。窓から外を見ると青空が広がっていた。

「いい天気だなあ。」

私はポツリとつぶやいた。けれど、

「風間さん、起きないな。」

さつきから朝食の準備をしているから、その音で目が覚めてもおかしくないのに。あ、西の方から江戸までの旅で疲れているからかな？ そうなら朝食の準備が整うまで寝かせておいてあげよう。

そして

「できた!!」

朝食完成 私は食器を準備し風間さんが寝ている部屋へと向かった。

「・・・まだ寝てる。」

私は彼にそつと近付いた。そしてなんとなく彼の寝顔を観察した。・・・なんか珍しいものを見ちゃった気がするなあ。おもわず微笑んでしまう。

「人の顔を見て何をしているのだ、おまえは。」

「かつ風間さん!!」

いきなり彼が起きたので驚いてしまった。

「あつ、なんか・・・風間さんの寝顔ってあまり見たことがないから珍しいなと思いました。」

「本当にそれだけか？」

「はっはい?!」

固まってしまった私を見て風間さんはクスクス笑いながら布団から体を起こした。

「あつ・・・だからっ！昨日とか、あの時みたいに強引に口付けされちゃって・・・仕返しみたいなのつもりで寝顔を見てやろう・・・」

みたいなですね?!」

そんな私のあわてっぷりを眺めながら彼はまた笑った。

「ふん。．．．もう少し素直になればよいものを。我等は夫婦めおととなるのだからな。おまえのその気の強さのようなものは生まれつきか？」

そんな風間さんの問いに私は答えた。

「風間さん限定だと思えます。」

その答えが面白かったのか彼はまたクスクスと笑い始めた。

「もうっ．．．！人をからかって。あ、そうだ。朝食の準備ができましたけど。」

と、私は彼に言った。すると風間さんは、「もう少し眠ってからにする。」と言った。その時、私の頭の中にもう少ししてどのくらいなんだろうという疑問が浮かんだが考えるのはやめにした。

「昨日も言っただろう？長旅で疲れていると。」

「じゃあ食べないんですか？」

「食べないとは言っていないが？」

「なら起きてください！」

じいじと睨み合いが始まる。両者、一步も引かないと思ったが、次の風間さんの一言は私の予想外だった。

「なら、千鶴。俺ともう少し寝るか？」

．．．本日二回目の思考回路停止。

「なんでそうなるんですか？」

私はため息混じりの声で言った。

「それに、おみそ汁だって冷め　ん！」

突然、風間さんの唇が私をふさいだ。本当に風間さんは強引で何もかもが突然で．．．。けれどそんな彼が私は好きだと思い知らされる。

そして　．．．

「あっ朝からなんですか?!いきなり！」

「・・・照れ隠しか？」

顔が一気に赤くなるのがわかった。そんな私を風間さんは楽しそうに見ている。本当に風間さんだったら。

「今はもう戦とは関わってはいない。だから別にゆっくりしていてもいいだろうに。どうせなら・・・おまえと共に。」  
と、彼は言った。

そして風間さんは私を引き寄せて・・・せつかく朝食作ったのに昼食になっちゃう。まあ、温め直せばいいか。

「風間さん。」

「ん・・・。なんだ？」

「いえ・・・。やっぱり何でもありません。」

「・・・？」

私は風間さんに微笑んで見せた。彼はわかっているのだろうか。私が・・・あなたと一緒にいる時間がどんなに幸せか、どんなに嬉しいのか。風間さんも同じ事を思ってくれているのだろうか。思ってくれていればいいな。そう思いながら、私は彼の温もりを感じながら側で目を閉じるのだった。

風間さんと私が西へと旅立つ少し前の出来事・・・。

青空の下の一室にて〜風間 千景編〜（後書き）

わたしは、薄桜鬼のキャラのなかだったら風間さんが一番好きです。だから一番最初なんです。（笑）

次は、平助君の予定です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4792/>

---

桜夢～さくらゆめ～

2010年10月8日22時18分発行